

淨土

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 一月一日發行
 昭和二十四年四月二十八日 運輸省告示第1235號 第三三五号
 昭和四十九年四月二十五日印刷 昭和四十九年五月一日發行



第四十卷

第五号

1974
5

先意承問



知恩院門跡信宏



先意承問

知恩院門跡 岸 信宏

前号で申しました法藏菩薩が因位修行中に、十方の世界の諸仏菩薩に仕えて修行をなされたすがたを説明してある無量寿經の中の句「和歌夢語」に続けて、この「先意承問」という句が出ています。これは「常に相手の人の意を先にくみとつてその意見を聞いて行動を起す」という意味であります。このことは家庭にあつても、社会にあつても、国家の間に於ても最も大切な心がけであると思います。

家庭の中の夫婦間、親子の間に於ても、また社会の上の労働者と資本家との間に於ても、更には自由と共産との国際間の問題に於ても、互に相手の立場を尊重して問題の交渉に当れば、まことの平和と秩序とが現われることでありましょう。

五 月 号



目 次

先意承問.....	岸 信 安
私のすきな寺 世塵になずまぬ忍濃律院.....	山 口 諦 存…(2)

特集 仏教と子供の世界

子供の世界と仏教.....	笠 原 秀 定…(6)
こども会をそだてる.....	竹 田 英 宣…(9)

中島真孝先生を偲ぶ

わが回顧.....	13
三七日法要も終って.....	大 橋 英 正…(16)
父を語る.....	中 島 真 哉…(17)

法然上人霊場めぐり④

第三番札所十輪寺・第四番札所如来院.....	村 上 博 了…(20)
經典に聞くシリーズ③ 仏説無量寿経卷上.....	村 瀬 秀 雄…(25)
新刊紹介.....	30

——遠田 弘俊著「念仏の声するところ」

津村 壽堂著「法然思想の原流と発展」——

念仏ひじり三国志① 法然上人をめぐる人々.....	寺 内 大 吉…(32)
ある随意 すみそめの心.....	磯 貝 基 教…(44)
浄土宗の宝物 法然上人絵伝(増上寺本).....	田 中 祥 雄…(47)

————表紙 久住 静雄画————

私のすきな寺

世塵になずまぬ忍激律院

山口 諦存

(兵庫県明石市光明寺住職)

洛南八幡町男山、石清水八幡宮の南麓神原町に、藪と木立にかこまれた約二千方メートルのひなびたわびしい小さな寺がある。寺というよりも庵室と呼ぶのがふさわしいかも知れない。

村の人々は昔から「にんちよう」とこの寺を呼び習わし、旧称の「昌玉庵」とか、今の寺号である「忍激律院」などと呼んでも、知る人は少いようである。くぐる三門もない、ただ内外を距てる結界石が傾いているだけである。このあたり一帯は洛中特有の底冷えもなく、洛西や洛北の雪のきびしさもなく、茶畑や田園のひらけた南をうけて、京洛では最

も暖かい地方である。

正月にはもう裏藪から笹鳴りが聞こえるという。やがて藪椿が二輪三輪と目当りの枝から咲きはじめ三月の彼岸ともなれば、鳥が群がりさえずって木々をゆさぶり、寺のしじまを破って椿が落ちつつける。鳥遊び華降る中に佇めば、当麻曼陀羅を繰りひろげた中にいる心地である。

東向きに宝形造りの本堂、廊につづいて北に庫裡、境内東南寄りに弁天堂がある建物はただこれだけであるが、配置が各々ところを得ている。戦後は寺有田もなく、昔ながらの無檀寺ではあるが、堂の瓦に一枚のゆるみも



=昌玉庵本堂=

ない。今もなお有縁の信徒の帰依をうけて支えられているのがこの寺である。

近代化の波はこの寺をとりまく風景を、年と共に変えてきたが、つい二十年ほど前までは広々とれんげ田や麦畑がひらけ、菜の花の黄、長々と続く茶畑の若緑などの自然美によ

って、寺の周辺は壮厳され、鶯の鳴く数はもう竹の秋たけなわとなるのであった。

青空に鯉鱗が泳ぎ、むせかえるような新緑の風が男山の頂に吹きあげ、風車が音をたてて鳴りつつける、初夏薫風の頃のこの寺は最も好ましい。

世塵になすまず超然として孤高を楽しむ寺域のたたずまいは、己くまで清寂をたもちつづけ、人を招き呼ぶことはしない。ましてや寺院のいわゆる近代的経営や、ここを観光化することはきびしく拒み、昔ながら求道の人々への念仏道場として、寺法を固く守りつづけている。

延宝二年（一六七四）十一月忍濃上人が堺の阿弥陀寺に住持せられた三十歳の頃既に、しきりに閑居の地を求めて弁財天に祈請し、たまたま南都の興正菩薩の創建にかかる、石清水八幡宮の本地堂即ち、南三昧堂跡の昌玉庵を得て復興せられたと伝えられている。

来訪者は庫裡の入口から南無阿弥陀仏と大声に称えて、案内を乞うのが寺の掟である。

南無阿弥陀仏と応答の声があれば住職在寺、なければ行乞、他行である。もし、不在ならば本堂前に廻って参詣するより外に致し方もない。

正面頭上に「南三昧堂」の扁額がかかっている。忍激上人の著「別時三昧法諺註」の序をものせられた、道交深い知恩院順真大僧正の筆である。

堂内を拝する。広い直壇の上、中央正面に阿弥陀仏が蓮台上に坐して在す。全長四メートル余もあろうか、室町末期と思われる相好円満な御容に接すれば、自ら合掌念仏がもれてくる。堂内は常行堂の様式となっているので、御本尊の周囲を直壇に沿って行道念仏することが出来るのは、鹿ヶ谷法然院と同じであるが、ここには外陣のしつらえはない。

とりわけ、印象的なのは直壇上の四隅に三メートルに余る、仏法守護の天部神である持国天、増上天、広目天、多聞天の四天王が形相すざましく在しますことである。御本尊とは全く異なる、静に対する動の姿態には寸分の

隙もない。又、莊嚴の様式は極めて簡素そのものであって、金色の宝蓋座光と御本尊の光り輝く前には浄机に五具足と一對の灯籠を配する捨世風なものであるが、左右の明り障子によって採光し、仏の慈と四天王の嚴とが、融然として一つの調和美を醸す、格調の高い雰囲気が漂っている。

この様式は元禄六年（一六九三）法然院を退き、ここに閑居した忍激上人の着想であって、ひたすら宗祖の遺風を慕い、持戒念仏捨世道場とせられた志願が今も生きている。上人はこの地にしばらく留まり、宗祖に大師号宣下を奏請するための草案を練り、遂に元禄十年東山天皇より初めて円光大師の贈号を拝することとなった、いわば裏舞台の地であることも、開宗八〇〇年を迎えて思い新たなものを覚えるのである。

眼前に拝する御本尊は昔、知恩院阿弥陀堂の御本尊であり、現在の阿弥陀堂御本尊は、もと八幡南三昧堂の御本尊であったみ仏が、火災のために御面相だけ残ったのを忍激上人

が護持していられた。たまたま、宗祖五五〇回遠忌を修するにあつたて、宝暦十年知恩院五十三世麗譽順真大僧正が特にこれを請けて、仏工田中康教にお体軀を加刻させて安置し、従来、の阿弥陀堂のみ仏を昌玉庵に移されたと記述されている。祖山、知恩院との深い縁が尊く思われてならない。

昌玉庵、旧南三昧堂は石清水八幡宮の、鎮坐以来の古い関係であることはいうまでもないが、八幡宮の例祭は八幡放生会（ほうじょうえ）といわれ、宇佐八幡宮より伝えられて、八月十五日最勝王経を転読し、十六日男山前の放生川に魚鳥を放った仏事であり、有名な葵祭を北祭というのに対して、南祭と呼ばれる大祭である。

宝永二年（一七〇五）上人六十一歳、八幡宮の神官今橋安貞に勧めて毎月放生会をつとめさせたので、村人は生きものをあわれみ殺生を恐れたという、生涯放生を奨められた上人は、八幡放生会のために「石清水勸行放生会記」を著わして、勸進を助縁せられた。

正徳元年（一七一）十一月十日、法然院に臨終を迎える前、自ら筆をとって「石清水勸行放生会記」の古い草案を改めて、命終せられたほど放生に意を注ぎ、人々に浄行をすすめられたのであった。今日もこの会記は当時の刊本が残っている。道念の強い上人の一面がここにもうかがえる。

学と行の二つを兼ね備え、弁説巧みな布教者でもあった上人の大きな足跡が、今はその名も忍波律院の清寂なただすまいの中に残る。余香を偲びつつ、弁天堂を拝して、上人が衆生済度のために、弁財無碍の大願を祈請せられた行状と思いつつこを去れば、境外の巢林庵跡の一隅に集められた古い墓石の群れが放つ、八幡の高い文化の香に魅せられ再び足を留めさせられる。

男山の嶺の新緑が夕日に映えて、まばゆいばかりに美しい。

○忍波律院へのガイド

京阪電車八幡町下車、京阪バス志水線「走上り駅」下車、川に沿って北西へ約二〇〇米、左側。



特集 仏教と子供の世界

子供の世界と仏教

笠原秀定

(東京芝天陽院住職)

桜の花も散り、野原も山も若葉の香りが高く、新緑が目にしみる頃となり、田のレンゲ草もじゅうたんを敷しつめたように美しくひばりのさえずりも聞えて来る。はるか遠くに見える山々も春らしく、本当に五月はのどかな感じである。こんな田園風景は、他の国では味えないわが国の美しさであろう。

長かった冬から解放され、身も心もはずんで来る。殊に五月五日は端午の節句で、昔から男の子どもを祝う行事をすることは、本当に意義あることであると思う。

屋根より高い鯉のぼりが諸所に見られ、沢山の鯉が風

をいっぱいはらんで、新緑につつまれ大空に泳いでいる様子は本当に勇ましく子どもたちの前途を祝福しているようだ。

鯉は出世の魚で、中国では鯉が滝をのぼり大空にまいて上って竜となると云われるところから鯉のぼりをたてて子どもの出世を願うのである。

このように昔から男の子が生れると、家族の一人として、大ぜいの者に祝福されて来たのであるが、戦後においてはこの五月五日は子どもの日として、国の祝日となり、国民全体が子どもを祝福し、今迄の子どもと云うこ

とについての考えが、新たに大きく考え直されるようになって来た。

これは世界戦争でわが国は敗戦したことによって新しく民主主義国家となり、憲法も新しく改められ、政治も教育もそれによって新しい方向に進み、子どもに対する考え方も変わって来たのである。従来家族制度も変り、大家族から核家族になり、子どもも家族の一員と云うことから社会の一員として考えられ重く扱われるようになった。夫々の人格を認め、将来日本を背負う子どもとして、よい環境の中で育てられなければならないと云うことになった。

こうしたことから昭和二十六年五月五日に児童憲章というものが制定され、子どもに対する正しい理念によって、すべての子供の幸福をはかるようになったのである。

児童憲章は全文十二条からなっているけれどもその前文には

われらは、日本国憲法の精神にしたがい、児童に対する正しい観念を確立し、すべての児童の幸福をはかるため、この憲章を定める。

児童は、人として尊ばれる。

児童は、社会の一員として重んぜられる。

児童は、よい環境のなかで育てられる。

と云われ、人権が認められ、児童福祉についても大いに考えられるようになったことは忘れてはならない。

しかし最近愛さるべき子どもが、また生きる権利のある子どもが生命をたれたり、捨てられたりすることが、新聞紙面をにぎわすことは誠に悲しいことである。

殊に親子心中で、子どもを遺すにすることは、残った子どもが可憐だと思つてのことだろうが、許さるべきことではない。

昔は子どもは、さずかりものと考え、神秘的な考をもつていた。子どもは勝手につくるものではなく、さずかるものの考えていた。

従つて生命の尊重ともつながり大切にした。ところが現在の世相は、科学の進歩と共に、すべてのことが物で解決するようになり、有難いと云う心はうすらいできた。

子どもはつくられるもの、自由に産めるものだと考え、さずかりものと云う考えはうすらいで来ている。母乳よりもミルクと云うことになり、愛情も薄らいできているのではなからうか。

人間の愛情と云うものは親子の愛情から始まる。授乳

期に母親が、お乳はもういいの、おいしかったの、と云う言葉から人間の交渉は始まってくる。愛された子どもは愛する子どもになる、母の愛情、親子の愛情から兄弟の愛情となり、友達との愛情ともなり、社会に対する愛情ともなってくるのである。

これからの子どもを育てることも、どのようにすればよいかと云うことについて新たに考え直してみなければならぬ。

最近に云われていることは、乳児期には盲目的に、たっぷり可愛がり、幼児期になれば可愛がらずに大事に育てると云うことである。

赤ん坊に乳を与える時の母親の表情は実に美しいものである。慈愛そのものである。

女は弱いが母親は強い、と云われる通り、女はやさしいものであるが、一たん母となると、子どものためには何でもやりとげるものである。それでこそ子は育つ、思い切って可愛がってやればよいのである。

幼児期になれば、つき出し、つき放せ、と云われている。もう三歳頃になると友達をほしがるようになる。それが証拠には、道を歩いていても同年令の子どもを見つけると、その方ばかり見ているようになるものだ。こう

なれば出来るだけ友達と遊ばせる機会をつくってやらなければならぬ。友達との遊びの中に、自主性も、創造性も養われ、自我の芽も育ち始めるのである。けんかをして泣かされることによって、友だちへの思いやりの心も育てられて来る。

また子どものしつけと云うことについても一つは、お裁縫をする時にしつけ糸をするように、礼儀、作法を家風にあるように教えこむことであるが、もう一つは稲を苗代からわけて田植して育てるように、自主、独立させるようにすることがしつけだと云われている。

仏教は生命の尊重を説き、物を大切にし、正しい道に精進し、立派な人間、円満な社会人として人格の完成を期している。そのためには子どもの時の教育、即ち仏教環境の中で仏教保育をすることが大事であると云うことで、寺院において、幼稚園や保育所を設置し、教化事業の一端としているが、本当に大事なことである。特に戦後においてはその数は急激に増加している。

幼児時代は心理学上でも軽信期と云われている通り、大人のような信心は出来ないが、子どもは抵抗なく、無心に手を合せることが出来、また純心そのもので、見たり聞いたりすることがそのまま身について行く、動植物

の世話をすることによって、動植物にも愛情をもち、生命尊重にもつながってゆく。人生の発達過程において、懐疑期にも入るが、このことから真理の探求にと進み、大きな心のよりどころを求めるようになる。

仏教保育は、本来子どもがもっている仏性を、仏教的



こども会を育てる

竹田英宣

(浄土宗青年会連絡協議会理事(天理市善福寺住職))

環境の中で、子どもの人格完成の一助として仏教的な信念を養う保育の一つであるので、あくまで子どもの幸福を中心として保育されなければならない。
子どもの日を迎えるにあたって、改めて子どもの幸福を考えたいものである。

明治のはじめ学制が設けられてより現代まで、わが国ではこどものことに関しては、すべて学校が全責任を持つというのが、一般的な考え方である。

交通戦争がはげしくなれば、学校で交通安全教育の指導を、学校給食が始まれば栄養教育から、食事の仕方まで学校教育の中で解決されようとする。又学校も、地域社会と密接につながっていることもあり、こどもにかかわりのあることは全て受け入れていくくらいがある。

こどもの、知情意が健全に生長していくためには、学校教育は大きな働きを占めることは勿論であるが、家庭教育、社会教育の大切なことは当然なことであり、特に家庭教育、社会教育の面に於て、宗教情操が大きな役割を占めなければ、真のにんげん教育にはならないと深く信じるものである。

近年生涯教育がさかんに論じられ、社会教育の重要性が重視されるに従い、今まで学校教育の中で解決されよ

うとしていた、社会教育の面、特に地域社会を単位とした「こども会」などは学校教育から離れてきつつある。

老人会、婦人会、青年会とともに社会教育の側からこども会も考えられ、運営されるようになってきたことは、制度としても当然であるし、大へんよろこばしいことである。

老人会や婦人会、青年会はそのメンバーが自主的に、組織し運営されていくが、こども会はおとなが側面より育成指導の手をさしのべる必要のあることは当然である。

それがため、各都道府県や、市町村では青少年の育成機関として、野外や室内の場の設定なり、リーダーの養成、あるいは、カウンセラーの配置等に力を注いでいる。社会教育の重要視される時代の要請である。

先日の新聞の伝えるところによると、義務教育の学校では当面週五日制は、学力低下の恐れありということ、時期早しということであったが、いずれ週休二日は時代の流れであると思われる。そうなること求められるのは休みの時間のすこし方と共に、施設や指導者等が要求され社会教育が一層重視される。

生長発達期にあるこども達の健全な「知・情・意」を

育てる上で、ややもすれば知識偏重のきらいのある学校教育よりは、地域性の強い中で育てられる、人間的なふれあいの深い社会教育は望ましいことである。

又、そうすることにより隣人愛や、郷土愛につながり、「全てのものを生かしていく。」仏教の根元的な願いにかなっていき、ひいては人類愛にねざした平和の心が育ち、いのちを尊ぶ人間性が形成されていくと思われる。

私も宗教家は、この社会教育の時代の要求を先取り（既に遅きに失するが）して、出家者として大いなる放棄ということからも、地域社会への奉仕という上からも、生涯教育、社会教育の面に進んでその役割をかって出て、一週を照らす時である。

まして、七〇年代の激動と混乱、狂乱とさえ言われる欲望と獲得の時代を現出したのはこの私である。私も宗教家がいたらなかったからである。自らの求道と教化が足らなかつたからである。と主体的に受けとるとき、大いなる放棄と奉仕の生活のできるのは、出家者としてのよろこびとして受けとめていきたいと思う。

開宗八百年を迎える今日、法然上人が平安末期の源平相剋する汚濁混沌の時代に苦しむ民衆と、幼き日の父の非業の最後に答えるべく、念仏一行をえらびとる道を宣

言なされた、その心を決定したものは、

「父の遺言忘れ難くして」

であると受けとるとき、幼児教育の大切なことはあらためて言うまでもない。

一体に教育とは、人間が人間に意図的に働きかける活動であり、又、民主主義教育の思想内容が、人間尊重であると言われている。しかし、現在の学校教育にしても、社会教育にしても教育的理念をもって相対し、制度として如何に取り組んでも、知情意一体の人間性ゆたかな生きた人間の生長を願うならば、人間の尊さということとは、宗教的などころまでもっていかなくては本質に迫ることはできない。目に見えない、形のないものに誠をつくし、大いなる生命に感動する宗教信仰の心がなければ、決してそれは真の教育とは言えないと私は信じている。

現代の我が国の教育のみならず、政治にしても社会制度の根底に、大いなるものに信じ仰いで、まことをつくす心がないことが一番悲しいことである。我が国現代文化の限界があり、世界各国よりエコノミック、アニマルと冷い眼でみつめられる最大にして、ただ一つの原因がそこにある。いずれにしても、私どものいたらなさを懺

悔するのみである。

同志社大学の創作者である新島襄先生は、日本をつくりかえるには、二個のダイナマイトがあればよい。教育と宗教であると叫ばれたのであるが、私ども今再び、幼児教育に努力することは、フレibel先生の申された如く「神からの命」として受けとらねばならないと思うのである。

明治から大正の初期にかけて、燃えるような願いをもつて、日曜学校やこども会を育てられた先駆者に思いをはせて、「どうしてもやらねばならぬ」という熱意と願いで、寺をこども達に開放し、深い宗教的な情操の中から祈りのあるにんげん、ねんぶつを申すにんげんをはぐくむ奉仕を続けたものである。

善福寺和爾こども会年中行事

月	日	行事名	備考
一	十五	新年こども会	初こども会、正月中に父母とともに作った手づくりのたごあげ大会としめなわなどの大とんど
二	第三土曜	ねんどさんく	涅槃図のもとに集り釈尊のお話をき

八			〃		七	六	五	四	三
一九 〇	七	一〇	三十一	七	第一土曜	第三土曜例	四	七	二十四
一泊訓練	七夕祭	ラジオ体操	清掃奉仕	展覽会	写生会、競書会	会	花まつり	新入生を迎える会	卒業生を送る会
十九日の午後から二〇日の朝まで 追跡ハイク、ゲーム指導、おつとめ、 キャンプファイヤー、ぼんおどりなど	月おくれの七夕さま、たんざくを各自 かいて楽しい夕を送る	希望者は夏休み中十月末までするこ ともある ぼんおどりのけいこもする	道路や境内のそうじをする。晴天講 座のかゆ供養	境内の弁財天の夏祭り	寺の境内を中心に写生会、本堂で競 書会	話し合いやおつとめのけいこ	月おくれの灌仏花まつり、皆んなで 集めて花で御堂をつくる	入園人学児を迎える、手製の花を胸 につけ誓いのことはに続いて歌やゲ ームで歓迎する	お世話になった六年生や世話役のお じさんおばさんにお礼をする、こど もらしいあたたかい催しにする

十二			十一	十	九		三十一	
三十	二十四	二十	第二日曜	第三土曜例	中旬	彼岸中日	下旬	三十一
清掃奉仕	こども十夜	ハイキング	ハイキング	会	敬老会	英霊追悼会	学習会	ラジオ体操
道路境内の清掃	夕食を共にしてキャンドルサービス 等年忘れの集いをする	近くの歴史の道を歩く、山の辺の道 など	学年で意見交換、おつとめのけいこ	寸劇や歌など、手紙を出してお年寄 りをいたわる	町主催の追悼会は献香、献華、献 灯、音楽法要で参加する	夏休みのまとめ写生会など	体操終了後音楽法要の歌練習	

○七月下旬には家族一緒にバスツアー主として海水浴
○八月中旬おつとぎ子ども奉仕団に代表参加

中島真孝先生を偲ぶ



わが回顧

芝中学校長をしていた時、八十何歳の老人を見て、自分もいつこんな年になるのかと思ったが、もう私も八十四歳になってしまった。いろいろなことをやって来たが、もう何の欲もない。それで、

長生きをしたしと人は言うなれど

われ八十四歳足れりと思う

という和歌を作った。

私は一ノ割六十三番地荒木勝三郎の三男で、椿の倉常寺の中島真孝という坊さんにもらわれていった。実は兄が行くわけだったが、一人では淋しいというのでいっしょにいったのだが、兄は坊主がいやになって帰ってしまったが、師匠がと

てもよい人で可愛がってくれたので、私は帰らないでいた。

武里小学校は二年生のなかばまできりいなかったので、おぼえているのは、砂山であそんだり、林の中で兵隊ごっこをしたこと位である。でも椿は第二の故郷で、武里は生れ故郷だからなつかしい。生れ故郷に来て、こんなたくさんの方々に話す、こんなうれしいことはない。

九月の円福寺のお開帳には師匠につれられてきて、家へも帰してくれた。すると父に「何しに来た」と大きな声でどなられるのでこわかった。それでとうとう坊主になってしまった。

アメリカへ行ったのは三十四歳の時である。私は芝中学か

ら東京高等師範を出て、始め地方の中学に勤めていたが、母校の芝中学で来いといわれたので喜んでいった。ところが給料は半分位になってしまったが、母校のためと働いた。

その時学校改革の問題がおこり、私に教頭になれと他の職員からおされたが、教頭がやめないので、まづくなって私がやめることになった。そこで帝国大学へ行ってもう一度勉強しようと思っていた時、石井という先輩がアメリカへ留学して大学を卒業して来たので、おれも出来ないことはないと思ひ留学の決心をした。ところが、金は貯金が二百円しかない。そこで実家へ帰って実父に相談したら、「行つた方がいいな」といっただけで、金を出してくれるとは言わない。その時は妻帯していて、子供が一人半いた。妻は椿の寺にあずけておけば食うだけは心配ないと思つて、師匠に相談したがどうしても許してくれない。どうしたものかと迷っている時、友人の年賀状に

大鵬つばさをはって大洋をこえる

しばし酔わんかなと、その味

と書いてあった。これだ、何が何でもアメリカへ行こうと決心し、又師匠に懇願した。それで四年なんて檀家の人にも言えないから、一年視察にいくということにしておけといつて許してくれた。

やっとアメリカへ渡つたが学費がない。二年間製材所で働いて金をため、ニューヨークへ行つて、コロムビア大学へ入学した。一年生を終つて特待生になつたので、二年目は授業料は免除になった。その時実父が死んだたよりを受けたが帰ることも出来ず悲しんだ。

他の学生は学校から帰ると、ダンスをやったり、コーヒーをのんだりしていたが、私はそんな金はない。安い青年会の寮にとまり、朝食の時昼食の分まで食べて、昼食はぬきに、帰つて夕食をうんと食べた。そして一生けんめい働いて学資を作つた。こうして一生けんめい勉強して四年の課程を二年で卒業して帰つた。今は飛行機で十九時間だが、五十年前は船で十九日かかった。

私はアメリカにいる時、日本とのちがいをよく考えた。アメリカは合衆国で、星条旗にあらわすように、十三の州が集つてできた国である。はじめは英国の植民地であつたが、イギリス人の外、いろいろの国の人が集つて来て、イギリスから独立して出来た国である。だからアメリカ人はこの国（ジスカニトリ）とはいふがわが国とはいひわない。わが国といふのはもとからいるアメリカインディアンだけである。日本人はみんな同じ民族であり、みんなわが国である。このことをよく考えなければならぬ。アメリカにはインディアンも

黒人もヨーロッパ人もいる。黒人をバカにして来たが、どんなふえて、頭の良いのもいるから黒人の市長ができた所もある。何でも頂点に達すると下り坂になる。栄枯盛衰は自然の理である。世界中に領地を持って日没せずの国といったイギリスも、今は植民地がみんな独立して、小さな本国だけになった。

日本人は頭がよい。イタリア人の母が、自分の子供に「前ははどうしてとなりの子のように出来ないのか」と言うとき、子供が「あれは日本人だから出来るんだ」と言っているのを聞いたことがある。日本人の頭は白人におとらない。それに日本人は頭と手を働かせる。ところがハワイにいる日本人は一世より二世、二世より三世と頭がわるくなってくる。氣候がよく、果物だけでも生きられるし、生活の苦労がないから、頭も体もゆるんでくるのだ。日本はきびしい冬、あつい夏があるので体がひきしまる。本当に日本はよい国だ。日本人は勤勉・正直・親切の特色を持っている。これさえあれば、民主国でも、共産国でも亡びることはない。この大切な三つの特色を忘れてはならない。日本が欧米に「おいつけ、おいこせ」と努力して百年でここ迄来たのも、あの大東亜戦争で到底に落ちながら二十年で戦前以上に復興したのも勤勉・正直・親切の三つの特色を生かした為である。

仏教もインドで生れ中国で育ち日本に来了。ところがインドでも亡び中国でも衰え、ひとり日本で実を結んでいる。おしゃか様は王位をすて一切をすてて衆生のために働いた。金など心配しなくても、まじめに働いていればどうにかなるものだ。私がアメリカへいった時も、戦後マルタ島へ世界教育者会議に行った時もたれかが出てくれた。

私は浄土宗の坊主であるから、法然上人の教えをお伝えする。

私たちが生きていけるのは、日常生活をこえた大きな力によるものである。これをつかまえないければならない。欲ばり、わがままをすてて、永久不変のこの力にたよらなければならぬ。日常生活からぬけ出て、もう一つの実在の世界にはいるのである。仏教では法身・報身・応身の三つの体があると説く。私たちが意識するとしないとにかかわらず、ある大きな力に導かれ、生かされているのである。生れるのも、生きるのも、死ぬのもその大きな力による。この大きな生命の一部をなしているのが人間である。小さな力が明滅して大きな力になっていく。この力があみだ様である。「なむあみだぶつ」どうぞあみだ様お願いしますと念ずる。それだけで安らかに生きていけるのである。

私は毎日念仏をとえる。一日三万べん。木魚を叩く。珠

数をくくるのも数えるためである。珠数は計算機で四十個と二十五個になっている。一廻りすると一千べん、これを十回すると一万べん、三十回で三万べん。こうしてあなたまかせ、

あみだ様にまかせて、心配も苦勞もなく、ただ感謝して生きているだけである。(昨秋郷里における講演から抜萃、これが最後の講演となった。「武里公民館だより」より借用)

三七日法要を終つて

大 橋 英 正

(東京芝学園中高等学校長)

先夜の本通夜、本日の表葬とも、さいわい案ぜられました天候にもわざわざいされず、滞りなく一切を終了することができました。先生のお徳のしからしむるところとはいえ、各方面の皆様から寄せられました弔意、追慕、敬愛が凝ってここにこの法筵が開かれ、しかも厳肅裡にとり行なうことができました。まことに有難うございました。

いま又、御部内の寺院方をはじめ、御同席をいただきました特に深い御縁につながる皆様によって、この三七日の法要が営まれ、懇ろなる御回向、御焼香を賜りました。関係者一同の齊しく感謝するところでございます。

葬儀の際にいただきました数多くの弔辞にもありました通

り、世寿八十五歳を以て人生を完うされました先生は、学者として、また教育者として、幅広い化導の実を挙げられました訳であります。一生を貫き通したものは、仏道修行の菩薩道であり、念仏者としての大行であったと思います。正に白道の一路を邁進されました。

三身礼をするのがわたくしどもの法要のしめくくりの一般であります。申すまでもなく、その三身とは、本願成就身(過去)であり、光明摂取身(現在)であり、来迎引接身(未来)であります。先生は、人生を完うせられたその時点で、過・現・未の三際が一如となり、三身が即一せられ、文字通り涅槃寂靜されました。

往詣薬邦を果されました先生には、この狂乱の時代、安楽国土に晏如としてはおられず、生前私どもをお導きいただきましたと同様に、否、むしろそれ以上に身心ともに休むいとまともなく、せわしい化導に立ち向かわれ、あるときは本願成就身として影現、あるときは光明摂取身として化縁を結んでいただき、またあるときは来迎引接身を示現して、お導きいただけることを信じて疑いません。

私どもは、精進の日々を、少しでも如法に、「生ける活動」に専心する覚悟ではありますが、希くは、穢国に還来して、人天を済度し給わんことを重ねて念願する次第であります。あとに残られました御内室様は、幸い健康に恵まれておら

れます。法嗣真哉様御夫妻は、先生につかえる心持ちと変りないことを確信していますが今後とも、先生に対して示された敬愛の念にも増して、御同席の皆様はじめ各位の御声援をお願い申し上げます。

また、法嗣真哉師も、齢既に「天命を知る」に至っておりますが、何分ともに、有縁の皆様のおかげ御指教により、万全を期したいと念願いたしておりますので、変らざる御後援を切にお願い申し上げます。

本日はまことに有難うございました。重ねてあつく御礼を申し上げます。

父を語る

中島真哉

(東京南青山海窓院住職)

寒さが漸く消えようと云う三月二十四日の朝、全く突然に脳内出血で父が倒れました。八十五歳とは云っても壮者を凌ぐ元気で其の朝も五時半の定時に起床し、洗面し、髭を剃っ

ています。

其の後一週間家族やら寺内、親戚、法類の方々の看病のうちに瞑目しました。

右半身不随と言語障害を起してはいましたが、数日後若干意識を取り戻し、動かせる左手に珠数を持つて僅かに口を動かし、珠数を繰ってお念仏を唱えているつもりで様でした。時にはその左手の指をのばして合掌礼拝するかの様な動作をするので左手に私の右手をそえようと動かない頭を動かそうとします。恐らく三礼をしているつもりではなかったかと思ひます。

この状態が意識がなくなる数時間前まで続きました。一日三回仏間で三万遍のお念仏を申し続けてきた功德ではなかったでしょうか。

お念仏について「毎日三万遍のお念仏を申しみて、はっきりと何かが判ったと云う所まではいかないが、何かおぼろげに判った様な気がする。それでいいんじゃないのか。」と云っていた事も記憶に新しい事です。

お念仏についても、又日常生活についても記録をつける事に依つて自分を怠惰から守っていました。「記録をつけなさい。これは他人に見せるものではない。自分自身の記録なのだ。自分のものなのだから偽らず正直につける事が必要だ。そして自らの生活を規制しなさい。私の息子などには何回となく自分の記録を見せて云い聞かせていました。」

朝の起床時間、室内温度、室外温度、お念仏の数、朝、昼、

夕、就寝時の四回、等々実として休みなくつけられています。倒れた朝も温度をきちんとつけていました。

大変几帳面に日常生活の記録を留めると同時に、恩愛の絆を離れ、愛欲に溺れない生活を最後まで頑張っていた様です。情に溺れ易い自らを戒めていたと思います。

「私兵を養うな。」と云う事も何時もの口癖でした。「人は適材適所でその人の力量なり、才能なりに合せて働くべきで、自分が面倒を見、世話をした人間だからと云つて自分の思う様に働かせる事は決してすべきことではない。やくざの親分乾分ではないのだ。」

誰に対しても同じ様な接し方であり、「私で出来ることなら何でもしましょう。」と開宗八百年の記念行事に長野県まで出掛けたり、群馬県まで結婚式の戒師に不自由な足で出掛けたりしていました。つい最近出生地の埼玉県春日部市武里公民館に請われてお話しに出掛けています。

昭和十四年中国に戦死者慰霊追悼行脚の際持ち帰った星月菩薩樹の日課珠数を大変に大切にしていました。が、学寮の学生が卒業して故郷に帰る時に記念に欲しいと云うと、貰ってもらえるならと三十年以上もお念仏の時に繰っていた珠数を差上げてしまいました。

亡くなる少し前に私がその珠数がないのに気付いて「どう

しました。」と尊ねると「欲しいと云うからあげたよ。」「誰にあげたのですか。」と更に聞くと「さあ誰だったかなあ。兎に角前にいた寮生だよ。」との答に多少あきれもし、何か教えられた様に感じました。

亡くなって密葬のお通夜の時だったと思いますが、宮城県出身の寮生であった奥清隆君が来て呉れて「方丈さん、良いでしょう。」と私にその珠数を見せます。「ああ君だったのか。親爺に聞いても判らなかつたので誰だったのだろうと思って

Ⅱ 法の花籠Ⅱ

毒 と 薬

華嚴經（けごんきょう）という經典に、「牛、水を食めば乳となり、蛇、水を飲めば毒となる」と、説かれています。この言葉は、同じ水を飲みながら、飲むものの立場によって、人体に有益な乳にもなれば、有害な毒にもなるという意味です。お酒にしても適量を飲めば体をあたため、心を柔らげ楽しませてくれますが、度を過ぎますと、乱に落ちいり、他に対しても不快な感情を与え、苦しみを味うことにもなりかねません。このように、一杯のさしかげんで毒にも薬にもなるように、日常生活

いたのだ。良いものを頂いたのだからこれからは少しでも余計にお念仏を申した方が良いでしょう。」と結びました。

足はリューマチで不自由でしたが、未だ未だ元気だと思っているうちに亡くなって、唯茫然として色々の事が思い出されますが感ずるままにその一端を書かせて頂きました。

お念仏のうちに亡くなった父がほんとうに有難かったと偲んでおります。

における行ないも、その人の心構えで毒にも薬にもなります。どんな場合でも、薬になるような、また自分の榮養になるような飲み方をするのが大事です。このような飲み方、心構えを正しく育てるのが信仰です。

「信は道の元、もろもろの功德（くどく）の母である」と、やはり華嚴經に説かれています。人間のあゆむべき道は、さまざまですが、その限りなくある道の根源に存在するものが、信仰であります。正しい信仰をもつことによって、正しい道は開かれ、正しい道をあゆむときには必ず恵まれた豊かな人生生活が育てられます。

せめて日に一つなりともよき事の数をつむこそ身の宝なれ

法然上人靈場めぐり
第四回

村上博了



第三番札所

高砂

十輪寺



第三番札所は、高砂市高砂町横町にある、嵯峨天皇御願所
宝瓶山地蔵院十輪寺である。

法然上人が、建永二年（一二〇七）三月十九日午下り、四

国小松庄へ左迂の途次播磨国高砂浦に船泊りとまされた。老若男女をとわず誰も、南無阿弥陀仏とお念仏を申せば必ず往生すると浄土宗を開かれた上人が船とて、数多の出迎い結縁者があった。その中に八田治部大夫と云う七十余りの老夫妻がいた。小船を漕ぎよせて、

私共は、この浦の漁夫です。子供時代から魚貝をとって生活して居ります。ものの命をとる者は、地獄に落ちて、その苦しみ耐え難いと聞きました。いかがしたならば、その苦患を免れられましょうか、お助け下さいませと、涙と共に合掌し、ま心こめて、お願いしたと、国宝勅修御伝は伝える。

浄土宗開宗八百年慶讃記念

馬堀 喜好 画



四国に御流罪の折、漁師・遊女を化益された処

〈知恩院所蔵〉

老先き短かい歿後も悩んで、み教を願うたのである。上人は「汝が如く成ものも南無阿弥陀仏と、唱うれば、仏の本願に乗じて、浄土に往生すべき旨」をねんごろに教えられた。二人は感涙にむせび喜びあった。そうして「ひるは浦にいでて手にすなどりすること、やまざりけれども、口には念仏を唱え、夜は二人共に、終夜念仏すること、あたりの人も、おどろくばかりなり」と云う。後來その老夫妻達は臨終正念、立派な往生を遂げられたのである。この事をきかされた上人は機類万品なれども、念仏するは往生の現証と、喜ばれている。

当時は餓鬼草紙に見られるように、因果応報の末法思想が浸透し、ものの命をとる者は地獄に落ちて、永久にむごい攻め苦をうけると信ぜられていた。内海を無心に遊ぎまわる、魚貝を捕り殺すことは、仮令生活のためとは云え老えるほど苦惱され、死後を思うと居ても立ってもいられない焦慮は、人間の本性である。このことは現代と雖も変わるところがない。殊に我国のように四面海国であり漁業者の多い国柄としては、上人のお念仏によって救われることは、真の仏法である。魚はその本質上寺まいりも、修行もすることが出来ない。人があって、如来の本願念仏の声をきかせる以外に方法はない。念仏の声する所、聞声往生の大利益が成就する。

十輪寺には元祖堂がある。上人宝瓶御影と西山国師像を安置する。上人御影は、小松庄綾川の奇瑞であった。大永七年二月十五日、泉州堺の十万人が大聖釈尊涅槃会に当り、釈尊の夢告をうけ高松に赴き、当所に持ちかえり、専修念仏道場を開いて安置したが、後に十輪寺に合併されたのである。

御影は立像、黒い素絹、大師衣、念珠をとっていられるが、七十五才の老体と拝される。慈願温容笑を含んでおり、肥り肉の堂々としたお姿である。堂前に「相生の松」がある。結婚式の時又は正月の床かけ等に用いられる例の老夫妻を配した吉祥で念仏の大利益を表示する。

お念仏を唱えるお方は誰でも、ともに白髪までお揃いで長生きし、毎日を幸福に送ることが出来る歓喜最高のよろこびを単的に標示する。念仏は阿弥陀如来のご本願であり、万徳所帰の大利益功德がある実証を物語る。御詠歌は

生れては 先づおもいでん 古里に

ちぎりし友の 深きまことを

と言う上人のお歌である。

歌そのものは、故郷をはなれて、はじめて親友知己の「ま

こと」を思い出るとする、しみじみとした人間味を感じる。さて信仰上からこれを見る時には、更に一步を進めて、人間と生れることは、前世に行った善根功德によるからで、先づその善事を思い出しては、更に一步をすすめて、毎日生き甲斐を持つ生活、換言すれば真実報恩生活をしなければならぬ。併し善根功德は一人で出来るものではない。阿弥陀如来の弘誓の願海には多くの同志がいた。念仏信仰を通じて「ちぎりし友」の「深きまこと」を思い出しては、口称念仏をすすめて一人も多く、如来の光明に攝取せられるように致したい。十輪寺が地藏院といい、地藏菩薩の大慈大悲を根底としていることを考える時、無常時の六地藏尊又淋びしい山里にも現れて、人生の仏性開顯念仏をすすめる、或は子育地藏厄除地藏安産地藏尊として、生活になくはならない、心あたたまる人間味を味う、一隅を照らす生活こそ、法然上人の佛を見る。上人の大慈大悲とお念仏の功德が魚貝に及ぶ広大さを示す霊場である。

第四番札所

第四番札所 尼崎 如来院

浄土宗開宗八百年慶讃記念

馬堀 喜好 画



四国御流罪の往路、帰路遊女の為に法要された処

〈知恩院所蔵〉

尼崎 如来院

一

第四番札所は尼崎市寺町の如来院である。同院は如来院珠光山遍照寺という。始めは神崎釈迦堂といわれ、聖武天皇勸願所、行基の開山と伝えられ、神崎四十八院の中の一院で由緒寺院であった。承元元年十二月、上人讃岐国小松庄からの帰途、神崎釈迦堂で同年春教化した遊女達が入水往生したことを知り、追善の別時念仏会を修行された遺跡である。同地は入信帰依者多く、彼らの懇望に応え、寺を浄土宗とし、門弟湛空上人を住持として留められた。

同寺八世永正十五年七月十三日同地に大洪水あり、堂宇仏像が流出、行基作と伝えられる釈迦牟尼像も海に流れ去ってしまった。新に善光寺如来を勧請し本尊仏と仰いだのである。茲に如来院の院号が出来た。翌十六年二月細川武藏守高国が尼ヶ崎城を築き、城下町経営するに当り、神崎から尼ヶ

崎大物に迂り、元和三年新領主戸田氏鎮により現在の寺町に移されたのである。

二

承元元年三月十八日、上人の御船は神崎川を溯上り、神崎橋上方二丁程の所に泊った、その時に傾城東、宮城、刈藁、小倉、大人と云う五名が、女衆に櫓を押させ、唐人傘(大傘)をさしかけ、上人船近く漕ぎよせて、

妾共のような罪深い女性でも、いかがしたならば、往生することが出来ましようか

と嘆願された。上人は、お念仏は弥陀如来の御本願をとனால்、老若男女をとわず、どなた様も必ず往生すること、詳しく教えられると、彼女達は有難くうけとめて、彼女らが黒髪を切りとり、上人に布施として捧げた、現在も如来院寺宝として、黒塗筥に収められてある。以上は十巻伝詳しくは黒谷法然上人伝と撰津名所図絵に見える。又上人秘伝には、江口、神崎両港遊女達が、上人の法話を聴聞感銘されたことを伝えている。御詠歌は

身と口と 心の外の 弥陀なれば

我をはなれて となえこそすれ

遊女化益の本旨も又妓にあり、絶対他力の念仏の大利益を明示して余す所がない。遊女の中に「徳来」と云う三十一才の婦人がいた。かつて死別した三才のみどり子を「今一度見せ給へ」と、上人に泣き泣き願って止まなかった。上人は「臨終の時見るべし」と仰せられている。大変味のある、含みのあるみ教である。その後、彼女らは彼女としての道を選び、念仏諸共入水してしまった。上人が釈迦堂で七日間の別時念仏会を修行、五輪塔を建てられたと伝えられる。東京芝増上寺所藏宗宝上人三幅絵伝には五輪塔が描写されている。

三

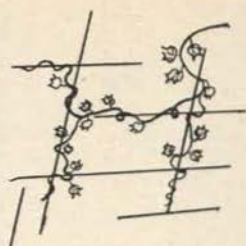
同院は、さきに釈尊像について善光寺如来像を安置、仏教発祥地印度の勝因縁をあげていることは特に注目されてよい。

お念仏が三国伝来の有難い無量の大功德があり、世尊と如来が喜んで納受されていることを物語る。仮りに偶然とするも、お念仏の功德あればこそ、よき正因縁が成熟し、女人往生の勝因となり、他力本願念仏の浄土宗特に上人の教化、教界無双、白眉である事を明示する、尊い霊場である。

仏説無量寿經

卷上(第三回)

村瀬秀雄



一 説法の機縁が熟す

時法藏比丘撰二取二百一十億諸仏妙土

清淨之行一。如レ是修已、詣二彼仏所一

稽首礼レ足繞レ仏三市合掌而住白レ仏

言。世尊我已撰二取莊嚴仏土清淨之

行一。仏告二比丘一。汝今可レ説宜レ知

是時。発二起悦三可一切大衆一。菩薩

聞已修二行此法一、縁致レ満二足無量

大願一。比丘白レ仏。唯垂二聽察一、

如二我所願一当二具説レ之。

時に法藏比丘は二百一十億の諸仏妙土の清淨の行を撰取す。かくの如く修しおわりて、かの仏のみもとに詣でて、稽首してみ足を礼し、仏を繞ること三そうし、合掌して住し、仏にもうしてもうさく。「世尊よ、われはすでに莊嚴仏土の清淨の行を撰取せり」仏は比丘に告げたまわく。「汝は今説くべし。よろしく知るべし、この時なり。一切の大衆を發起せしめ悦可せしめよ。菩薩は聞

きおわらばこの法を修行し、よみて無量の大願を満足することを致さん」比丘は仏にもうさく。「ただ聰察を垂れたまえ。わが所願のごとくに、まさにつぶさにこれを説くべし」

(意訳) 時に法蔵比丘は二百十億という多数にのぼる仏国土の中から、淨土を莊嚴するにふさわしい清淨の行を選択し終った。五劫にわたる長い間の修行を完成した法蔵比丘は、世自在王仏のもとにゆき、頭を深くさげて仏のみ足をいただき、仏の周りを三たび廻って礼拝し、合掌してから仏に申し上げた。「世尊よ、私はすでに淨土を莊嚴するにふさわしい清淨の行を選びとりました」すると仏は法蔵比丘にいった。「汝は今こそ選びとった清淨の行を説くべきである。汝は説くべき機縁がまさしく熟していることを知らなくてはならぬ。汝の説く行を聞くことによって、すべての人々に淨土に往生したいと願う心を起さしめ、人々に喜びを与えよ。おそらく菩薩たちは汝の説くところを聞き終って、その法を修行し、それによって無量の大願を成就することになるであらう」法蔵比丘は世自在王仏に申し上げた。「仏よ、ひとえにお聞き下さい。そして發願の是非についてご推考願

います。私はこれから自分の願う所をつぶさに説くことに致します」

二 光明 無量の願

設我得^レ仏、光明有二能限量^二下至^レ不^レ照二百千億那由他諸仏国^一者、不^レ取^二正覚^一。

もしわれ仏をえたらんに、光明はよく限量ありて、下百千億那由他の諸仏の国を照らさざるに至らば、正覚をとらじ。

(意訳) もし私が仏になったならば、私の光明は限りがなく無量のものとなって、百千億の千億倍よりもっと多くの仏国土を照らすようにしたい。もしこれができなかつたならば、私は仏にならない。

阿弥陀仏の光明は挙身の常光といって、仏の全身から常に無量の赫々たる光明が放たれている。この光明は念仏を唱える者をあまねく照し、そのものの心を柔和にし煩惱を消滅させる。また苦界に沈む者を照しては苦悩を

救う。このように阿弥陀仏の光明は無量であるから、念仏を唱える人々を広く、同時に救済できるのである。

三 寿命無量の願

設我得_レ仏、寿命有_二能限量_一下至二百

千億那由他劫_一者、不_レ取_二正覚_一。

もしわれ仏をえたらんに、寿命はよく限量ありて、下百千億那由他劫に至らば、正覚をとらじ。

(意訳) もし私が仏になったならば、私の寿命は限りがなく無量のものとなって、百千億の千億倍の劫ようもつと永く、永遠の未来にまで及ぶようにしたい。もしこれができなかったならば、私は仏にならない。

阿弥陀仏の寿命は無量であつて、永遠に続く寿命を保っている。このことは阿弥陀仏の身体には老衰その他の変化がないということであり、常住不変の実在者であるということである。このように阿弥陀仏は永遠の仏、永遠の仏として念仏を唱える人々を広く順次に無限に救済し続けてゆくのである。

四 念仏往生の願

設我得_レ仏、十方衆生至心信樂、欲_レ

生_二我國_一乃至十念、若不_レ生者、不_レ

取_二正覚_一、唯除_三五逆罪_二謗正法_一。

もしわれ仏をえたらんに、十方の衆生が至心に信樂して、わが国に生ぜんと欲して乃至十念せんに、もし生ぜずば、正覚をとらじ。ただ五逆と正法を謗するを除く。(意訳) もし私が仏になったならば、十方世界のすべての人々が真実の心をもつて疑いなく信じ、歡喜して淨土に往生したいと願ひ、乃至十念するならば必ず淨土に往生させるであらう。もし往生できない者があれば、私は仏にならない。ただ五逆罪を犯すか正法を謗するものはこの限りでない。

人々の素質や境遇はそれぞれ違っている。世の中には智者もいるし愚者もいる。持戒の人もあるし破戒の人もある。道心のある人もない人もある。慈悲心のある人もない人もある。また善人悪人の区別もある。富裕の人も

貧困の人もいる。しかしこうした差別に関係なく、すべての人々が念仏すれば往生できるのである。念仏を唱えるには内心と外見とが同じであって、裏表のない誠実な心で念仏を唱えなくてはならない。それにはまず自らを深く反省し、己れは自力によっては救われることのない凡夫であるという自覚にたち、だからこそ阿弥陀仏の慈悲心を疑いなく信じて念仏を唱える。念仏を唱えることによって浄土に往生できることを心から喜ぶのである。乃至は多から少に向うことであるから、生涯を通じて念仏を唱え、最後の臨終に至るまで念仏を相續するのである。念仏は一度に数多く唱えるのもよいが、むしろ行住坐臥の間にあつて絶え間なく唱えることが大切である。生涯を通じての念仏は幾万遍という数多いものであるうが、しかし臨終の十念でも一念でも浄土に往生することができる。念は声に通じ十念は十唱ともいって、声に出して南無阿弥陀仏と唱える。この場合の声は自分の耳に聞える程度の大きさでよい。

南無阿弥陀仏は仏の名号を唱えることであるが、名号の中には仏の功德がすべて含まれている。功德の中には阿弥陀仏の智慧も光明も、その他仏の万徳が含まれてい

る。このように勝れた功德のある念仏であるが、念仏を唱えることはまことに易しい。念仏は老若男女の区別なく、貴賤賢愚の差別なく、いつでもどこでも容易に唱えることができる。こうした念仏を唱えることによって誰でも浄土に往生できるということは、阿弥陀仏の縁なくして起される大慈悲の心によるものである。これを喩えていうならば凡夫という瓦礫が念仏によって浄土に往生し、菩薩という金に変えることができるいうことができる。

念仏を唱える者が親殺し等の五逆十悪の重罪を犯したり、仏法を謗ったりする者があれば、その者の浄土に往生することは難しいことになる。ただし過去において五逆十悪の重罪を犯したり、仏法を謗った者があつたにしても、その者が念仏を唱えれば重い罪業も滅せられ、心に阿弥陀仏たすけ給えと思ひ、口に南無阿弥陀仏を唱えることによって、その者は浄土に往生することができる。

五 来迎引接の願

設我得_レ仏、十方衆生發_二菩提心_一修_二

諸功德_一、至心發願欲_レ生_二我國_一、臨_二

壽終時_一假令不下_二大衆_一圍繞現_中其

人前上者、不_レ取_二正覺_一。

もしわれ仏をえたらんに、十方の衆生が菩提心をおこし、もろもろの功德を修し、至心に發願してわが國に生ぜんと欲せんに、壽終の時に臨んで、もし大衆のために圍繞せられて、その人の前に現ぜずんば、正覺をとらじ。

(意訳) もし私が仏となつたならば、すべての人々が菩提心をおこして多くの功德のある行をおさめ、眞實の心をもつて淨土に往生したいと願うならば、その人の壽命が終ろうとする時にあつて、私は多くの菩薩たちに囲まれながら、その人の前に身を現わして淨土に迎えとるであらう。もしこれができなかったならば、私は仏にならない。

菩提心とは自らは仏果を求めて修行し、それと同時に

他を教化することをいうのであつて、その具体的内容には宗々によつて諸説がある。しかし他力の菩提心は淨土に往生したいと願う心のことであり、同時に現世に還來して人々を淨土に往生させたいと願う心のことである。それには多くの功德がある念仏を唱えることを主とするが、それ以外の善行をおさめることも忘れてはならない。阿彌陀仏を圍繞する菩薩たちは慈悲の觀世音、智慧の大勢至の両菩薩を初めとする二十五菩薩及びその他の菩薩たちである。

凡夫の心はいつも貪りと怒りと愚かさのために散乱の状態にあるので、まして臨終に際しては邪心が競い起つて、そのために正念往生が妨げられる。阿彌陀仏は凡夫の臨終のすがたを慰み、自ら凡夫の前に現われて來迎される。つまり念仏を唱える人は臨終にあつて阿彌陀仏の來迎をうけ、導かれて一念の間に淨土に往生することができる。もし念仏を唱えない人の場合には、その人の臨終に阿彌陀仏の來迎にあずかることができないし、そうかといつて凡夫には自らの力によつて往生を求めることが至難なことであるから、恐らくは惡道におちることになりかねないのである。

遠田弘俊 著

新刊紹介

津村諦堂 著

『念仏の声するところ』

——一紙小消息を頂いて——

このたび東京小石川慈眼院住職の遠田弘俊上人は『念仏の声するところ——一紙小消息を頂いて——』という述作を刊行された。遠田上人といえは、宗門でも世評の高い布教家としてすでに広く親しまれているが、ここに上梓された新刊は、まさに説教一筋に歩まれて来た遠田上人の永年のご努力の賜物である。

さて、背表紙には「昭和説教」とあえて銘記してあるが、その内容は、一紙小消息を十二席に分けて撰述した説教文である。宗祖法然上人のご法語である一紙小消息に、ひととき心をひかれた著者が、実際に即した日頃の研鑽を踏まえて浄土信仰の何たるかを平易に説き明かしている。ところで本書は説教集という性格上、文体は講述文であり、ある意味では一般書と異なって読みにくい面もあるであろうが、それを補って余りあるのは著者の謙虚な偽りのない姿勢である。つまり本書は、一紙小消息に基づいて順次解説しながら

『法然思想の源流と発展』

——浄土教成立の過程——

本書は昨秋出版されたものであるから、すでにこの欄で紹介するには時機を逸してしまっただけかもしれない。このことは著者並びに読者に対して心からお詫びしなければならないが、それにもまして本書紹介の意義のあることは、本書の卓抜した内容がおのずと証明するだろう。『法然思想の源流と発展』と題された本書は、はっきりいつてきわめて学術的な労作である。今ここで本書の学問的価値を批評することは、紙幅の余裕のないことばかりでなく紹介者の力量もまた及ばざるところである。以下内容の一端を目次から拾う程度に止めたい。

本書は副題に「浄土教成立の過程」を添えられているように、日本に仏教が伝来してから飛鳥、奈良、平安の各時代を通して、浄土教の流伝の具合を精密に尋ね、さらに法然上人によつてはじめて大きく把握された浄土教思想を詳細に検討し、それに付け加えて法然

ら、各席ごとに寓話として著者の体験談が挿入されている。この挿話は、念仏信仰への著者の溢るる熱意を感じさせるものであり、本書の大きな特色である。すなわちそこには著者遠田上人自身の永い信仰の道程が語られているのであり、法を求めまた法を弘める二利の行に徹して来た苦難の足跡がにじみ出ているのである。

開宗八百年を期して、私家版として一書をものにされたわけであるが、こうした著者の誠意と尽力はまことに尊いものであらう。法話の中に織り込まれた著者の足跡の一つ一つは遠田上人自身にしてみれば、懐旧の念ひとしおのものと推察される。おそらく本書の持つ本当の価値は、著者遠田上人の体験の真摯なひたむきな信仰姿勢を理解したときにはじめて明瞭となるものであらう。もとより念仏信仰に強要はない。浄土の教えとは、「南無阿彌陀仏」と素直に称えさせて頂いておのずから開け行くものである。その意味で、遠田上人の講述にも信仰の無理強いはない。たださりげなく自分の信仰を披瀝して、ご法語を頂くのみである。すなわちそのときに、各講題中に触れられる著者の思い出が珠玉の如く輝くのである。

変型四六判 二四八頁

発行所 東京都文京区小石川三一七―一二

〒一一二 慈眼院

上人の弟子達の姿勢も明確に叙述している。つまり本書は、第一編「日本浄土教の始源」、第二編「法然の浄土教」、第三編「法然浄土教の発展」の三編からなり、正鵠をきわめた論証はまさに著者の備える正当な方法論を如実に浮き立たせる。とはいうものの、大きく日本史の流れを踏まえる史観に対して、いささか物足りぬ感もあるが、一つの仏教思想史として厳密に取り扱うことを本旨とする著者にしてみれば、こうした論述法を取らざるを得なかったのかもしれない。

ところで本書の著者津村謙堂師は秋田県角館町報身寺の住職であり、序文を書かれたご門主のお言葉にも、「東北の偏地に在って黙々と法然上人の研究に励んでおられる。それは名を求め、利を願う為にはなく、只ひたすらに祖師法然上人を究め、法然上人の偉大さを顕彰せんことを願う法然門葉の一人の学徒であります」とあるごとく、著者は永年に渡って法然上人研究に誠実に挺身されてきた人である。もとより本書もまた浄土宗開宗八百年を契機として生まれた一書であるというが、こうした積年の努力の結実がもたらされたことはまことに喜ばしいことである。

A5判 二七二頁 一一〇〇円

発行所 東京都新宿区早稲田町四二

〒一六二 明玄書房



念佛ひじり三国志

—法然をめぐる人々—

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



奈良の小禅師——

父信西の屋敷では、みんながこう呼んだ。今も門前で出会った兄の是憲は、昨日父からの使者を得て帰郷したと告げると、不思議そうな顔をした。

「ほほう、少禅師に使者が向けられたか」

「もう小禅師ではございませぬ。この春からは入位の僧

で、名前も明遍」

南都で僧侶として一本立ちになった事実を主張した。「明遍か。ではこれからは人詰めしの明遍だな」

と、この異母兄は笑った。

去年まで各所に散らばる信西入道の子供らへの走り使いは彼の役目だった。何処へいっても使者の言上にひと理屈添えるので「人詰めしの小禅師」と呼ばれて兄たちから苦笑や失笑を買った。人詰めしとは人をやりこめるという意味だ。無論この理屈、ともに相手にはされなかった。

兄の信濃守是憲は御所へ出仕するところらしい。門の内側で侍者が月毛に鞍を用意していた。ちつとは時間があるだろう。

「都も変りましたるあ」

と立ち話を求めた。ひと理屈こねまわしたい姿勢である。

「お前、都はそんなに久しぶりだったか」

「まる一年間の無沙汰です。めっきり新しい家々が建ち並びました。左京の方にまで」

「うむ。夜の大宮通りなど夜更けまで酒色をひさぐ家々は灯を落さぬ」

「父上が予言された繁栄ですな」

「繁栄……そんな予言を父上はいっつされたのか」

「保元の戦さが終った直後です。これからは繁栄いちずの時代が到来すると」

「繁栄のいちずの時代か……」

「兄上はこの繁栄を見せかけだとおっしゃるのですか」

「小禅師、わしは未だ何も言っておらんぞ」

是憲は涼やかな眼で弟を見た。信西入道の二十名を越える子供らはそろって秀才であったが、この是憲はその中でも抜群だった。

「眼が、そのお眼がおっしゃろうとしています」

「小禅師奴、背伸びしおって……ところで南都、さよう叔父の法印殿は何と申していたかな。近ごろの政情を」

兄の頭脳は素早く回転する。早くも明遍が奈良で何かを聞きこんだと洞察している。

その通りであった。つい四五日前、師僧の敏覚法印から語られたばかりである。父の信西と権中納言信頼との仲が峻悪になっていて、とりわけ源家の総帥左馬頭義朝が信頼に加担する気配だと。

ちなみに東大寺別当の敏覚法印は高階長門守の子で、信西はひとところこの高階経敏の猶子になっていたことがあった。

権中納言信頼は軽薄な才子、後白河上皇の寵を得てとんとん拍子に出世した男だが、その寵愛には淫靡な衆童関係が噂されているほどで、信西の政敵としては取るに足らぬ存在だと敏覚法印は断言した。恐ろしいのは左馬頭義朝。

「頭の殿を信頼卿に結びつけた原因は兄上、あなただと言うではありませぬか」

明遍は切りこんでいった。

「うむ、父上が義朝殿からの聲養子の話をにべもなく拒

絶されたからだ」

「是憲は学匠の器。無知な武家なぞへ参る人間ではござらぬ、とおっしゃったそうだ」

「奈良では見てきたような取沙汰をしているのじゃないかし拒絶された頭の殿よりも恐ろしいのは太宰大貳だ」

太宰大貳とは平清盛である。義朝からの聾話が破れた直後、清盛は自分の娘を信濃守是憲へ妻合せてきた。信西はこの縁談を容れた。

「学識や権力はあっても武力のないお父上。太宰大貳との縁結びは百万の味方ではないでしょうか」

「武家の争いに巻きこまれてゆくことが、そんなに頼もしいと思うか、明遍」

兄はここで初めて、まとも呼び方をしてくれた。明遍は図に乗った。

「それと、清盛殿は後白河院の御落胤とか。院の心はつねに……」

「軽々しい憶測はするな、小禪師」

鞍の支度がととのったようである。侍者が月毛を引いて門外へ現れた。是憲は馬上の人となった。

「今宵は御所で」

「宿直にすることになるな」

「兄上、明日にでもくわしいお話を」

「父上が使者まで出して小禪師を呼び寄せた用向きの内容を、わしも聞きたい」

月毛を五六歩やって、是憲は手綱を引きしぼった。築土越しにそびえる信西屋敷の巨大な建物を、今更のように眺め入っている。

保元の乱のあと、父信西は驚くべきエネルギーを注ぎこんで大内裏や院の御所を修復した。あわせておのれの住居も贅美をこらして新築したのであった。

「明遍、この屋敷、嫌な形をしているのう」

馬上から声をかけてきた。

「この屋敷が、ですか」

「あの屋敷を見よ。唐国^しぶりとても申すのかな」

板葺きの上にいちめんに青竹が編まれてあった。どこかの邸でも見かけない新様子である。

「父上ご自慢の……」

「明遍、お前源信僧都の往生要集を読んだことがあるか」

突然話題を転じてきた。

「はい、東大寺に所蔵するものを読みました。地獄図絵

＜雲火霧地獄＞



が精細に書かれてございます」

「源信僧都があれを書かれたのは寛和元年と聞いている。七十年ばかり前のことだな。御堂関白道長公の全盛期が始まる少し以前だ」

「さようでございます」

「繁栄の絶頂だな……なぜあの繁栄の絶頂で、地獄図絵を書いたのか、わかるか」

「さあ」

「お前も入位の僧になったとか。下らん政情のことなぞ考えないで、もっと仏の道をきわめればいい」

兄是憲の月毛は、西洞院姉小路、信西入道邸をゆっくりと離れていった。

一一

父の信西入道は外出から未だ戻っていないかった。明遍は紀伊ノ二位朝子から蓬餅と茶の饗応を受けた。

普通の貴族屋敷なら対ノ屋の円座にすわりこ

むところだ。だが信西の新郎はすべてが唐国ぶり。板の間に円座がわりに木椅子や木卓が並べてあった。茶の味も舌に馴れぬホロ苦がしいものだ。

当時は未だ抹茶はなかった。煮こんだ葉茶を飲む。

「宋から渡来のお茶で、右京大夫さまから分けてもらったものですよ」

と、女主人は説明した。右京大夫とは誰のことか。明遍には判らない。

支那茶は苦がくて飲みづらい。明遍が舐めるようにして、はかどらぬうちに、朝子はもう二杯目を淹れていった。

やはりこの人は父上の女だ、と明遍は思った。すっかり唐国ぶりになった夫の趣味にそのまま同調してゆけるのである。

父上の女——明遍はこの表現がびったりだと得心する。紀伊ノ二位朝子については、奈良で敏覚法印からさまざまな話を聞かされてきた。

妻さまじい出会いだった、と敏覚法印は回想する。未だこの師僧が俗人で、北面の武士だったところである。

鳥羽上皇の後待賢門院が四ノ宮を生んだ。のちの後白河帝である。待賢門院の侍女だった紀伊ノ二位は乳母に

選ばれた。

決して美女ではなく、院にいる間も誰一人彼女をかえりみる男はいなかった。だが四ノ宮の乳母となった瞬間、この醜女に激しく言い寄ったのが信西であった。

すでにこの以前、信西は高階家の娘で葉室長隆の未亡人を妻とし多くの子を生ませていた。彼女も美人の誉れが高かったし、また明遍自身の生母憲ノ局（さとのつぼね）も保元の乱で命がけて争った悪左府頼長がねらっていた美女だった。

色恋の沙汰ではない。野望だ、と敏覚法印は言いきる。

幼い親王をかたわらに寝かせて、信西がこの醜女の身体を抱きしめたとき、たけり狂った血は性愛とは無関係なエクスタシーを求めていったのだ。かたわらで眠るこのみどり児にすべてを賭けたのである。

この強烈な欲求に朝子自身の血も湧き立ったに違いない。この人と一緒にいつか必ず権力の座に就くのだと。

宏才博覧、信西には通ぜざるものはなかったと言われる詩文の才にぬきんで、和漢の史籍を深く徒渉し、卜占、天文に至るまで明るかった。

鳥羽上皇が東大寺へ御幸した。正倉院の御物をご覧に

なつたとき、何に使用したものか見当がつかぬ古壺が出てきた。上皇は東大寺の僧や侍者の学識におたずねになつたら誰も答えられなかった。

末座にいた藤ノ給事という卑官だった信西が進み出た。

「これは三礼図に型が示されている投壺器と申す古器でございませう。たしかこの壺中には小豆が三粒封じこめられてあるはずです」

「何のためにか」

「穀物の豊饒を祈る目的でございませう」

封印が切られ、壺は逆さに振られた。果たせるか上古の干からびた小豆が三粒こぼれ落ちた。

これほどの学識、天下無双の博覧でありながら、信西の地位は余りにも卑小だった。出身が低かったからである。

なぜ廟堂はこの信西の才を認めぬのか。恐らく醜女朝子の身体の上で信西は男泣きに泣いたことであろう。必ず必ずこの親王さまと共に、と紀伊ノ二位も涙のなかで男の背を抱きしめたに違いない。

だが運命は、そうは容易く二人の烈々たる野望にこたえてはくれなかった。

永治元年の末、鳥羽法皇の意志で崇徳帝は讓位した。待ちに待った十五年間。当然十五歳になっている四ノ宮践祚の好機到来だ。だが信西たちの期待は無残に裏切られた。法皇は三才の幼帝近衛を選んだのである。

さすがの信西も落胆した。宮廷から姿をかき消して比叡山へかくれた。通憲を信西入道と改めたのはこのときである。

まこと信西や紀伊ノ二位の期待にそむき、成長した四ノ宮は放蕩無頼だった。今様と呼ばれる歌謡にうつつを抜かし、連夜白拍子を招いて酒池肉林をむさぼっていたのである。比叡山での信西は、しかし覇気を失って隠遁していたわけでもない。ここでも彼はエネルギーに天台学をまなんだ。とりわけ源心僧都がひらいた浄土思想をきわめた。のちに天台の異流と言われる慧檀流の一派に通憲流という伝承が形成されたほどである。

僧としても一流の学匠だった信西だが、やはり出身の卑しさは比叡山でも納得のゆく地位を与えられなかった。この聖地もすでに廟堂政治の延長上にあったのである。

落飾した頭頂に再び黒髪をたくわえて、いやすでに黒髪は薄く、半白なものがまじりこんでいた。信西は廟堂



の片隅に出仕するようになった。

久寿二年の冬であった。鳥羽法皇は熊野へ御参詣。那智の滝をご覧になった。滝のそばで一人の僧が修法に身を打ちこんでいた。ところがこの僧、供奉の者が話かけても言葉がさっぱり通じない。彼がしゃべる言葉はまるで鳥がさえずっているようだ。

「多分、宋人の僧でしょう」

と、信西入道は進み出た。そしていつ習いおぼえたのか、巧みな中国語で宋人僧と会話した。いちいちその言いつ分を法皇に通弁した。

この僧は淡海沙門という名で、故国で千日の修法を終えた。結願の日、観世音菩薩に現前して「日域の那智山にいますわが化身を礼せよ」と命ぜられたので渡海してきたという。

それにしても、と宋人僧はいぶかしげに信西に訊いた。「あなたは宋の人間か」「いや、違う」「いつ何処で我が国の言葉をそれほどおぼえたのか」

宋人僧の疑問は鳥羽法皇も同じであった。法皇の問いに答えて信西は、今後のわが国が大陸との貿易に全力を傾けねばならぬことを力説した。繁栄はこの交流によってもたらされる。

「その昔の遣唐使を復活させねばなりません。遣宋使派遣ということになれば、どうしてもかの国の言葉自由にこなす人材が必要です。私奴はそれにこたえるべく独学でまなんだのです」

堂々と言いきって法皇を感嘆させた。

この熊野行幸は、十七才になった近衛帝の御病氣平癒を祈願したものだ。だが祈願も空しく、鳥羽が帰洛すると、ほどなく近衛帝は崩御した。

あれから十四年間。合せてじつに二十九年目であった。待つて待ちくたびれて、とくに諦めきった四ノ宮後白河帝の即位が実現したのであった。

すでに信西と紀伊ノ二位朝子は喜び合う言葉すら忘れていただろう。じつとお互いの眼の中を覗きこむだけでよかったのだ。野望はもはやこの夫婦の血となり、脂肪と化していた。

あの二人を見ていると、地獄の羅刹鬼女に見えてならぬ。

とは敏覚法印の結語であった。

とすると、父信西が予言した保元の乱後のこの繁栄は、地獄で咲き乱れたあだ花とも言うべきなのだろうか。

明遍は、もの静かな、それこそ虫も殺さぬ風情で異国茶をすすする紀位ノ二位朝子の横顔を、そっと覗きこんだ。



暮色が姉小路におりたったころ信西入道は帰宅した。一人の公卿を伴っていた。赤ら顔で、でっふりと肥えた人である。

四位ノ右京大夫邦綱卿だと紹介されて、明遍はさっき振舞われた支那茶を思い浮べた。朝子はこの右京大夫からお裾分けしてもらった、と告げたものだ。

「小禅師、お前を呼び寄せたのはほかでもない。一度天台山へ渡って来ぬかよ」

父の信西はこともなげに切り出してきた。

「天台山とおっしゃると——」

「きまっておる。宋国の天台山だ」

「それほど簡単にゆける土地なのですか」

「なあに鎮西の博多へ出て、そこから船に乗りこめば明州まではひとつ走りよ」

父の信西はすでに何べんか往復したような口をきく。

知識だった。無双の宏才博覧が信西入道の脳裏では天台山をすぐ隣地に近づけてしまったのであろう。

十七才の明遍には鎮西の博多すら気の遠くなるような土地であった。まして言語も未通な異那へ渡って、何が出来るというのか。

かの国が戦乱に巻きこまれたゆえもあって僧侶の入宋は絶えて久しくなかった。延久三年に成尋が渡ったのが最後であった。延久三年（一〇七一）はこの平治元年（一一五九）から八十八年昔になる。

黙りこんでしまった明遍が大陸渡航を納得したと判断してか、信西はかたわらの右京大夫を相手に持ち前の早口で、さかんにまくしたてはじめた。

若い明遍が年齢に似合わず利発で、また身体も強健であると言説している。さらに出発までには必ずある程度の語学力も身につけておくと確約した。

どうやら今度の渡航が、この右京大夫邦綱を推進者として企画されているらしいことが明遍にも判った。

邦綱は全く無言で信西入道の穴舌に聞き入っていた。語り疲れたころ、ようやく重い口をひらいた。

「よく判りました。明州へゆく砂金船に、小禪師殿を加

えておくことに致しましょう」

のっそりと立ち上がると、紀伊ノ二位がすすめる夕餉を手を振ってことわり、信西邸を出ていった。

「不思議な男よ、あの右京大夫は」

信西は妻へとも明遍へともなく言った。

右京大夫邦綱は由緒ある出自ではないという。前右馬頭盛国の子だが、その家は三代にわたって蔵人にさえなれなかった。ところがこの邦綱は雑色から身をおこして、とんとんと出世していった。

「どこから持ってくるのか、あの男、無尽蔵に砂金を握っておる。惜しげもなくそれをばらまくのじゃ」

まず法性寺関白忠通に取り入り、最近では平清盛が邦綱がいなければ夜も日も明けぬという有様である。とにかく昨年なぞ毎日一品づつだが、一日も休まずに六波羅の屋敷へ付け届けをしたということだ。

「何しろおのれの娘が現二条帝の乳母ではあるし、飛ぶ鳥を落とすとは彼のことだな。いや世の中も変わったものだ。しがたない雑色が僅々十年足らずで大福長者と呼ばれて禁中を我がもの顔で歩きまわる」

信西入道の太い嘆息は、そのまま彼自身の面上へふりかかってくるのかも知れない。信西とてもしがたない儒家

ではなかったか。それが保元の乱後の三、四年間でたちまち宮廷第一の実力者にのしあがったのだ。

たしかに信西は学殖という武器で宮廷政治を撫で斬ってきた。右京大夫邦綱は未だ信西には遠く及ばぬ地位ながら、学殖に替る金という武器でのし上がってきているのだった。

信西の嘆息には当然侮蔑が色濃く混じりこんでいる。金銭は学殖に比べれば遙かに卑しい。だが、その持てる魅惑はどちらが深い。

信西は不安を感じていたに違いない。邦綱の財力の秘密を、砂金を大陸へ運び、かの地から新しい品々に持ちこむ操作にあると読み取った。だからこそこのルートへ我が子の明遍を渡航僧として送りこもうとしている。

「さあ小禅師」

信西は氣おい立った表情になった。

「はい」

「これからお前に仕こんでやるぞ。宋国の言葉をな」

明遍は一昨年の冬、六日六晩殆んど眠ることもなく三論玄義を叩きこまれた父信西のきびしい修学を思い出さずにはおれない。

思ひ出は再現した。明遍は父信西が発する異国語をく

り返し暗誦しなければならなかった。

今更のように造詣の深さに舌を巻く。父は長い宋国語のセンテンスを、まるで詩文でも吟ずるようによつてのけるのだ。二度や三度では到底そらんずることができない。

明遍がつかえると、信西はかたわらの弓権をふり上げて、その頭頂や肩先を容赦なく叩いた。

もう枝部の外に朝の光りがあふれてきた。ようやく信西は学習をやめた。

「ひと眠りしようかい。今日は院の御所で用事が山積しておる。小禅師、向うへいってやすめ」

明遍が廊下へ出たときだ。出会いがしらに一人の男が馳けこんできた。

「殿は？」

「その書院に」

明遍は男のただならぬ気色につられるように再び父の部屋へ取って返した。

「面妖な知らせが、いま届きました」

男は息をはずませて報告をはじめめる。

「何だ、左衛門尉」

男は後白河上皇の側近にいる北面の武士だった。もと

は信西邸で雑色をしていた左衛門尉師光という。

「太宰大貳がつい先ほど旅に出ました」

「清盛がこんな早朝何処へ立ったのか」

「熊野参詣とか」

「何を突然に。して供の者は」

「一門の主だった衆がそろって」

「重盛もか」

「はい。六波羅屋敷は空らっぽになりました」

「まるで左馬頭や信頼に叛乱をけしかけているようなものだ」

「わたくしもそう思います」

「平氏の武衛がなければ、都は裸も同然じゃ。清盛の意

志であろうか」

「さあ、その点は——」

「誰かの指し金であろうか」

「信西は天井を凝視する。そのまま黙りこんでしまっ

た。

彼の半白髪をおいた頭蓋の内側は、いま渾身の回転を

開始したに違いない。

策謀——その策師は誰か。目的は何か。

思いあたる顔を三つか四つにまでしぼってきたように

ある。しかしそれ以上は進み兼ねている。

「そうだ……左衛門尉。その知らせをどこから受けたの

か」

「思いついて信西はたずねた。」

「はい。五条にいる親王さま付きの武者所師清が」

「五条の……あの右京大夫」

「邦綱卿は親王をおつれして、何処ぞへ退転の準備をさ

れはじめたとか」

「邦綱が逃ぐ出す理由はあるまいが」

「そうでしょうか」

「この画策の火元は、本人の発意とも思えぬが新大納言

経宗あたりとわしは見る」

「経宗卿が」

「彼は左大臣の地位を熱望している。その点で右大臣を

望む信頼とは同じ穴のムジナじゃ。しかも経宗は二条帝

の外戚。右京大夫邦綱とは昔から仲が深い。左馬頭らが

右京大夫を襲う道理はない」

「ではなぜ逃げ仕度を」

「判らん……強いて理由を考えれば」

「何でしょうか」

「右京大夫自身が策謀の本尊であった場合じゃ」

「しかしなぜ邦綱卿がそんな真似を。みすみす頭ノ殿（義朝）や権中納言（信頼）卿に天下を与えるようなものですか」

「そうだ。そうとしか考えられぬな。ただしだ。目的がこの信西をおとし入れることだけだったとしたら」

「殿をおとし入れる目的で」

「うむ」

再び信西入道は黙りこんでしまった。

どうやら策謀の主を、新しいライバル四位ノ右京大夫邦綱、官位は低くとも恐るべき財力を持つこの大福長者にしぼってきたようである。

彼の挑戦にどう対処すべきか。信西の脳細胞はこの一点だけをめぐって精力的に回転し続ける。

「小禅師」

突然鋭く叫んだ。

（はい）

「薨（き）を開けよ」

明遍は歩み寄って板薨（い）を押し上げた。

戸外で朝は全く明け放たれていた。澄んだ青空が都の上（う）にひろがる。

信西は窓辺へ寄ると、もの珍らしげにその青空を見上

げた。しかしやがて、

「あっ」

と叫び声を発した。

「どうかなさいましたか」

左衛門尉師光が走り寄った。明遍もつづいた。

「あれを見よ。あの虹を——」

「虹ですか」

「見えぬのか。あの日輪にかかった虹を」

「あれは霧では」

「たわけ。あれはな、白虹と申すのじゃ。白虹太陽をつらぬく。太凶の兆しがあるぞ」

明遍にも虹には見えなかった。太陽の前に薄雲がたなびく光景なのだ。

しかし父信西入道の五体はがたがたふるえはじめている。

「いかん。あんなものが現れてはいかん。天命が尽きる」

もの狂わしく叫ぶのであった。

（つつく）



△ある随想▽

すみぞめの心

磯貝基教

(甲府市尊経寺住職)

墨染の衣にねずみ色のおけさをつけた法然を御覧下さい。烏帽子もきざる法然の教をしっかりと心に受けとめたい。法然は志学の年令より長月日にわたり骨肉を削る思いで勉強にいそしんだ。「よろずの智をもとめ、諸々の学者にとぶらいしに教うる人なく、示すにともがらもなし。」と研学修行のみに精進した学者法然の清楚な知的の姿を私は心から尊敬している。

現在、経済界は高度に成長し物資豊富の繁栄により、自由と充ち足りた生活を楽んだ日本人は最近の公害に悩み、インフレ、石油不足、エネルギー危機に悪乗りする大企業の悪徳ぶりが世の批判を浴び、政府の政治姿勢に対して多くの国民は失望を深め、ともすれば明日への展望を見失ないがちな時代相を描景に、人類の危機を思わせる、現実の様相を呈している。物量的繁栄のかげに豊

かな人間性が失なわれている。大切な精神面の拡充が必要である。

この様な時に法然浄土開宗八百年を迎え、各本山、地方寺院にては開宗記念として、堂塔伽藍の整備に記念事業、慶讃法要に莫大なる財貨を投入して行事を行うようだが、これは素朴な学者法然の精神に反し、本末転倒も甚だしい感がある。私は法然開宗の時に際し自分の今日まで歩いた道を深く反省懺悔して、第二の人生への出発点としたい。私は昭和十年甲府在の善昌寺という田舎の貧しい寺の住職となり、戦前、戦中戦後と甲府市の県立高校に教鞭をとり糊口をつないでいた。田舎から甲府へと毎日二時間余の苦しいバス通勤で、十年間よくも通勤したものだとしみじみとした思いである。時はうつり甲府の現在の寺に帰り、老師の手伝いと教員生活で夢我

夢中で働いた。昭和四十一年老師病床の身となり、尊牀寺の一切の寺務を担当しつつ教職生活を続けた。それこそ東奔西走で苦しい毎日ではあったが、生徒の指導と寺務多忙に生きがいを感じていた。昭和四十三年定年退職し寺務一本となったが、何かと気持ちにゆとりなく、まわりを取りまく連中にふり廻わされているといった感じで、自信喪失の状態であった。老師なき後に老を感じ、にわかにこんなにも年老いたかといった感慨であった。

ふと気がつくとき恥ずかしい話だが、浄土の教義が自身から離れている事に気が付いた。教義の問題、浄土の存在、不信の問題と次から次へと大いなる疑問の壁に打ちあたった。それに今までの教壇生活から寺坊の坐行と変り、生活のリズムが狂ってしまった。これでは住職の地位を去らねばならぬだろうかと極めて深刻の苦悩とはなった。

私は二十代に加行道場に入り墨染の衣に古來所伝の伝法を身につけているので、一応の修行は身につけているが、三十余年の教壇生活の空白をおぎなうべく、研学求道の一步として、仏心を身につけんため原点に帰るため、法然誕生の地である美作の誕生寺に参拝を思い立った。ひなびた田園にめぐまれた豊かな素朴の清浄の地

に、墨染の衣に真摯な研学にいで立った法然の姿を思いおこし、心豊かに心洗らわれる思いであった。以後私は悩み解決のため、浄土教関係の教義、著書をかたはしからたゆまず精進研修にいそしんだ。つとめて研修会などにも出席したが、愚鈍の私にはなかなか理解しがたいものが多々あった。善導の観經疏などすぎるばかり興味をもって読んだが、難解で容易には消化できなかったが、現在は私なりに難解な浄土門の教が理解に近づき、解明されたかの思いで、念仏がすなおに申されるようになった。以上は私のおろかな求道の記録であり、今後はより以上にけわしい道を辿らねばならぬだろう。

法然は学問求道の生活においてそれこそ苦難の連続であった。「われ聖教を見ざる日なし木曾の冠者京洛に乱入のとき、ただ一日聖教を見ざりき」とあり血みどろの研修が不断の努力で続けられたのであるが、善導の觀經正宗分散善義に、

一心ニ專ラ念ジテ 弥陀ノ名号ヲ 行住坐臥ニ不レ間ヘ時節ノ

久近ヲ 念念ニ不レ捨テ者 是ヲ名ニ正定ノ之業ト 順ニルカ

彼ノ仏ノ願ニ故ニ

の文により悟りを開き、ただ一向に念仏することにより

眞実の人生が開かれる事を悟つたのである。ここに承安五年法然四十三歳にて浄土開宗とはなったのである。

“会員倍增運動にご協力を”

○本会も発足以来四十年を経ましたが、時あたかも浄土宗開宗八百年、この意義ある年を迎え、更に一層の法然上人鑽仰運動を展開いたしたく存じます。

○本誌もこの機会に誌面を一挙に十六頁増し、四十八頁とし、内容の拡充につとめたいと思っております。幸いにも寺内大吉先生のご理解、ご協力を得、今月号から「念仏ひじり三國志」と題する長編小説を掲載することになりました。ご期待下さい。

○今まさに一大鑽仰運動を展開するために、会員の倍增運動を併せいたしたく、一人でも多くの方々をご紹介いただけますようご協力の程願ひあげます。

○永らく表紙絵をご担当いただきました松濤達文画伯が、都合により今年号より休筆、かわって久住静雄画伯にご執筆いただくことになりました。松濤画伯には引続き、寺内先生とのコンビで「念仏ひじり三國志」の挿絵をご担当いただくこととなっております。

さて法然は四十三年の年月にて、一応浄土念仏門の知見を開いた業績は誠に偉大なるものであるが、智慧第一の法然房が学僧として生涯をかけ血みどろになって研修精進を続けたとしたならば、法然の知見は日本の法然のみでなく、世界の法然として、輝くばかりに燦然と生きたであらうことを私なりに意見を提起したくなるのである。

思うにこの人生は三つの煩惱である貪(とん、むさぼる無限の欲望)、瞋(じん、いかりうらやむ心)痴(ち、理性を失したおろかさ)、の業のおそろしさの多い、けがれの多い人生である。浄土は生きとし生けるものが憧れをもつ理想の境地で、永遠に限りない生命と無量の光をもつ現実でもあり、また阿弥陀の世界であり、この浄土に憧れ、称名念仏を称える教が浄土教である。念仏することにより清浄の心となり、自己の動作行為が正しく行なわれ心が美しく行動が浄らかに正しく行なわれる時に、念仏生活の喜びがある。だから弥陀の大慈悲を信じ念仏の教をつらぬく時に、現実の苦痛、人生の住みにくい苦しさが消えて、明るい光明が開けるのである。私は開宗八百年に当り法然のすみぞめの衣と叡知と知見を学びとり、まず原点初心に帰るべく努力を重ねたい。

浄土宗の宝物

『法然上人絵伝』(増上寺本)

法然上人の伝記や絵巻物は比較的多い。十七種とも十九種ともいわれるほどある。しかし絵巻となると良質なものはかなり限られてくる。宗内では何といっても知恩院所蔵の『四十八巻伝』が有名であり、一番よいとされている。日本文化史上、絵巻の発達は、それぞれの祖師の一代記を絵説きにするという一つの機能をもっていることが重視される。今でも和歌山県の道成寺などは縁起を絵説きで説明しているほどである。ところで知恩院の『四十八巻伝』が超一流の絵巻物であることは周知のところであるが、宗内にもまだ優れた絵巻があることを忘れてはいけない。ここに紹介する増上寺所蔵の『残欠二巻法然上人伝』もその一つである。

増上寺には「為恭本四十八巻伝」も所蔵しているが、これは新しく、弘化四年の春から嘉永五年にかけてのもので、どうも知恩院所蔵の『四十八巻伝』を写したものであるようだ

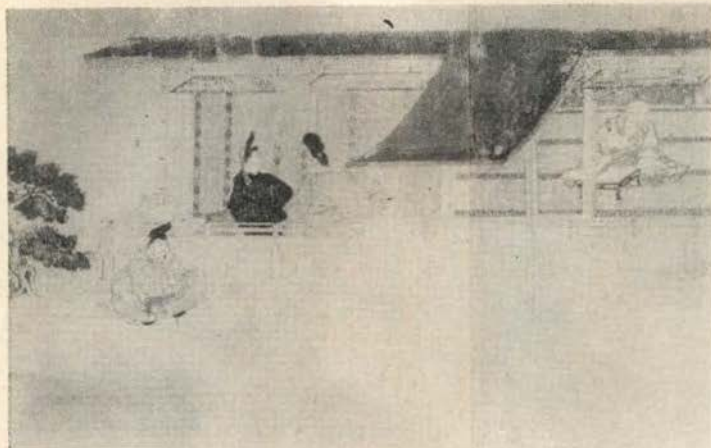
三尊来現(部分) 下巻第5段



法然上人がある夕暮れ、縁先で念仏していたところ、弥陀三尊があらわれ言葉をかわし、その後たびたび出現したという。

が、為恭の四十八巻伝は他にも二本あるようだ。為恭の作品は三河の大樹寺などにも多いが、何といっても増上寺の『四十八巻伝』などはその粹たるものといえよう。増上寺にはこ

後白河法皇説戒（部分）下巻第3段



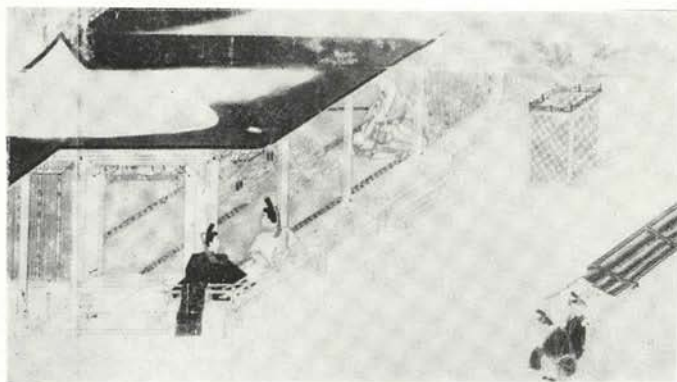
法相，三論など各宗の研鑽をつみ，この評判が
後白河法皇の招請となり御談義がかわされた
という。

れとは別にかなり古いといわれるが、全部そろっていない法然上人の絵伝がある。全部そろっていないので残欠という表現在されている。これは増上寺の記録からすると、詞書は後

二条天皇の宸翰で梶井宮空性法親王の書継ぎで絵は土佐吉水とされている。増上寺いや浄土宗中興の祖といわれる普光親智国師が慶長十四年に後陽成天皇より賜った時にはすでに残欠二巻であったとされている。現在は東京国立博物館に保管されている。残欠になってから上・下の区別がされているが、上巻は第一段に父時国墓碑建立・中陰供養、第二段に母子訣別・観覺の坊に入る、第三段に殿下邂逅・登比叡山源光の室に入る、の三段からなり、下巻には出家受戒から上西門院説戒までの八段を入れている。どうも下巻の第七段の高倉天皇受戒のところは絵の内容と詞書が異なっているように思われる。

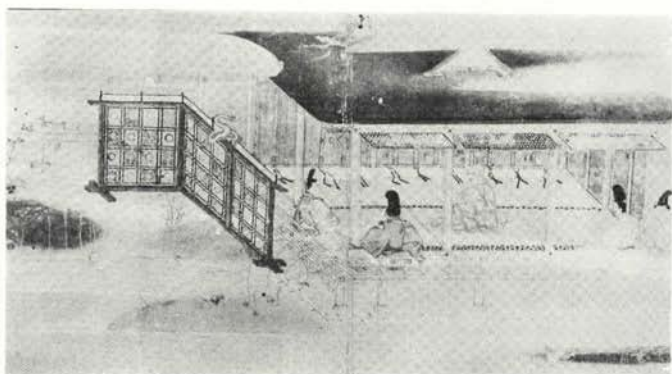
一方成立を考えると、嘉禎三年（一二三三）より正安三年（一二三三）の間の成立とされているが、絵巻の内容から考えると、後二条天皇の御在世中にまでしぼられよう。いろいろ考え合せると正安年間に成立したといえよう。しかし作者についてはいろいろあって判定しがたいが、増上寺記録などを中心にしてみると毘沙門堂明禪とされる先学もいる。しかし原本の絵巻も当然存在したと考えられる。また絵などの内容からしてもかなり高い階層の人々を対象としてつくられたふしも強く、全部そろっていたら宗内では一番の絵伝ということになるが、いかにせん残欠二本が残念だ。（田中祥雄）

高倉天皇受戒（部分） 下巻第7段



高倉天皇が清涼殿に法然上人を召し、戒をうけるところ。

上西門院説戒（部分） 下巻第8段



法然上人が上西門院の御所に召され七日間の説戒を行なつたとき、大蛇が草むらでこれを見聞し、結願の日死に、そのとき頭が二つにわかれ天人が現われ空へのぼつたという

「浄土」購読規定

一部 定価 百三十円

(送料十二円)

会費一カ年金一、五〇〇円

(送料不要)

浄土 五月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和四十九年四月二十五日 印刷
昭和四十九年五月一日 発行

定価 百三十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

弊会発行の恒例教化トラクト

『お ぼ ん』

新書判・表紙共 12 頁

定価 一部 18 円 (200 部以上 16 円)

送料・実費

“おぼん・せがき会の施本に好適です”

諸経費高騰の折から、今般価格は多少値上げさせて頂きました。
お早めにご注文を頂けますれば幸甚です。

浄
土

第
四
十
卷

第
五
号

定
価
金
百
三
十
円
(送
料
二
円
料)

浄土宗開宗八百年記念トラクト

『法 然 上 人 と 浄 土 宗』

B6判 96頁 定価 180 円 (〒 70円)

(200部以上 単価160 円 送料実費)

内 容

第一編 法然上人のあゆみ

第二編 浄土宗のおしえ

第三編 信徒の心得

附 法然上人略年譜・参考文献

開宗八百年の聖辰を迎えました。本会ではこの慶祝を期しトラクトを
作成いたしました。檀信徒用施本・慶讃法要記念品などとして広くご
利用下さい。

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法 然 上 人 鑽 仰 会

電話 (03) 262-5944 番